

闘う高校生

教育奪還・反戦・反安保

10・21 斗争に決起せよ

1

創刊号

全国高校生反戦闘争委員会連合中央関誌

目次

○ スローガン	1	
○ 結成宣言	1	
○ 総括（第一次書記局）	2	山田 ひろえ
○ 「高校生の位置づけ」について	10	青田 慎一郎
○ 〆高反委〱運動論	12	南 昭
○ 〆校 〆高反委〱総括	16	藤井 薫
○ 〆校闘争委総括	18	水島 ゆり子
○ 「反戦高協」運動論批判	22	松葉 みどり
○ インターナショナル	23	

高反委 スローガン

教育奪還斗争の旗の下 本来の学問と自治を 教育斗争と反戦斗争の結合によつて奪還し 斗う全高連を建設せよ!!

70年安保条約の高校生に対する抑圧に抗し産学協同路線・国防教育・学費値上げ・御用生徒会を粉碎し 文部省を実力破壊せよ!!

結成宣言

われわれ高校生が「人殺し」になる時が刻一刻と近づいてくる。

戦後世界体制の根底的危機の進行はあまりにも早く、そして日本帝国主義の危機の進度は、われわれの生命の危機の進度と不可避的に一致する。

「独占」の融合は早く「貧者の行進」も間近である。

高等学校は、「期待される兵士達」を「社会の要請」と「御国のため」に生産する。

われわれから教育と学問があらゆる手だてを使つて部分的にはなく全面的に奪われる。核弾頭の進軍ラッパが鳴り渡ればわれわれは「人殺し」になるだろう。だれかがいうだろう「憲法九条がある。」と。だが、「社会の秩序」は「人殺し」を肯定する思想であつた。

世間の苦情はそれ以上の意味をばやなさない。

われわれが「人殺し」になる……

その日が近づいている。

だがしかし諸君、われわれは決して「人殺し」にはならない。むしろわれわれはそれを「拒否」するだろう。この「拒否」のカギこそ、われわれの教育を奪還することにある。われわれの手で学問と教育を部分部にはなく全面的に今こそ「奪還」しようではないか。

本来の教育を奪還せよ。

教育奪還斗争の旗の下教育斗争と反戦斗争の結合によつて高校生運動の大衆展開を克ちとれ。

全高連結成の旗の下全ての高校生は全国高反委連合に

総結集せよ。

一九六八年九月十九日

全国高校生反戦闘争委員会連合

総括

高校生反戦闘争委員会

第一次書記局 山田ひろえ

はじめに

昨年の10月8日の全学連、反戦青年委員会の血のにじむような苦斗によつて切り開かれた佐藤訪ベト阻止羽田斗争以降、高校生運動も一定の高揚とそれなりの質的量的発展を遂げた。しかしながらそれは、あまりにも多くの理論的誤謬をその胎内に内包していたが故に、その後の過程においてもまた長い試行さく誤を拡大再生産的に続けざるを得ないものとしてあつた。乱立する自称「高校生運動の指導部」なるものあまりにふがいない指導性の故に大衆の爆発的なエネルギーが幾度となく、彼等の「党派斗争」||「党派利害」の下に霧散させられ

たことであろうか。もちろん我々は、いわゆる党派斗争を全く否定するものでは断じてない。党派斗争は全面的にかつ圧倒的に保証されなくてはならないであろう。しかしながら、それは、全ての大衆の前に全面的に開かれた単一の大衆組織を保証したうえではじめて真の党派斗争が、大衆運動の指導性の問題をめぐつて展開されなくてはならないであろう。このことについて無自覚な全ての高校生活動家はすみやかに自己の大衆に対する責任において、自己批判しなくてはなるまい。混乱せる高校生戦線を唯一正當に止揚すべく今ここに誇りをもつて登上する我全国高反委連合は、その結成にいたるまでのほぼ一年間に渡る苦斗と少なからぬ誤りの全過程を自己批判的に総括しなくてはならないであろう。

1. 高反連—「解放派」への道

我々の初期の課題はいわゆる、ベ平連系市民運動への深いかわりから自己を解きはなつことであつた。昨年9月ベ平連系高校生組織として高校生反戦連絡会議なるものが結成された。それはよりするにベ平連のデモに参加して来る高校生をそのわくの中に囲い込むことを唯一

の使命としていた全く無内容なものであり、我々がその中にたとえ数日間にもせよ参加していたということ痛みをもつて自己批判しなくてはならないであろう。「だれもが入れるデモ」と言つたとたんに、だれもが、否、一にぎりのいやらしいベヘレン主義者どもを除いては参加することのできないデモ、参加する意味の全くないデモ、そのようなものでしかべ平連のデモはなかつたのだ。そこからの自己分離を我々はブチブル急進主義をテコに高反連解放派、さらに高校生反戦斗争委員会の組織的自立という中で成し遂げてゆく。

2. 高反委―ベトナム反戦斗争へ

1月6日、新たに高反委として組織された。我々はベトナム反戦斗争へと一直線に突き進んでいく。

それは、多くの欠落点と特に運動論・組織論上に最大かつ最深の誤謬を含んでいながらも反戦斗争一般としての正しさをもつものであつた。我々はここで反戦斗争の今日的意義を再度確認しておかなくてはならないだろう。反戦斗争の今日における意義を語る時、まず我々は次のことを確認しなくてはならぬ。それは現代における反戦斗争は、まさに帝国主義の世界的存在ということに

決定的に規定されたものであるということである。

帝国主義と戦争。この二者は密接なそして根源的な連関をもつものとしてとらえられなくてはならないであろうと思われる。なぜかというならば、資本主義の、その最高の発展段階としての帝国主義の矛盾の集中的表現として戦争は帝国主義の市場分割戦は不可避となるのである。

「工業の驚くべき成長と、ますます大規模な企業への生産の集中の著るしく急速な過程とは資本主義のもつとも特徴的な特質の一つである」―レーニン著帝国主義論―とレーニンが言うように、生産の集中と資本の集積は資本主義的生産様式の不可避の過程であり、結果である。資本主義社会は自由競争を建て前とするが、しかし資本の盲目的な行動論理を貫徹させるためには、ありとあらゆる術策と策謀を必要とする。この資本の行動論理は大企業に弱少企業を併合させ巨大企業を創出する原動力である。競争は独占に転化していくのである。さらに独占はあらゆる手段と方法をもつて自らの姿を維持、拡大せんとする。それは、独占の払い難い本質的衝撃でもある。それは、具体的にはカルテル・トラスト・コンツ

ェルン等の形成をもつてその意図を貫徹しようとするのである。

全社会の全ての物質が―精神までも―商品となり、商品観念が縦横無尽に我々の社会を踏みこむように、独占はカルテル、トラスト、コンシエルンをもつて、彼らの組織を全社会にはりめぐらすのである。カルテルをもつて独占企業家団体を、コンシエルンをもつて独占企業家一家を形成するに至るのである。まさに、この段階に達すると、産業資本は自由競争をくぐり抜けることにより、小数の巨大産業資本に転化し、数種の産業部門を掌握し、原料の供給↓生産↓販売を一手におさめ、世界の原料資源の概算から商品販売の推測までも行なうことができるようになるのである。次に銀行資本の集中、集積と、産業資本との連関を考えなくてはならない。なぜならば、帝国主義 段階を根本的に規定づけるものは巨大産業資本と銀行資本の結合による金融資本的な蓄積様式をもつた組織的独占だからである。銀行とは本来、支払の仲介機関である。つまり、遊休貨幣資本を全社会から集め、利潤をもたらす資本に転化し、それを資本家階級に貸しつける役割をもつていのである。しかし、銀行

資本としても、資本である限り、拡大、発展を拒否することは自滅を意味するが故に、銀行資本は産業資本と同様、少数の巨大銀行に集中、集積される運命にある。だが、しかし、ここで注意せねばならないのは、単純に量的な拡大再生産という側面をみる限りでは、決して帝国主義段階に於る銀行の役割を把握することはできない。という点である。つまり、その質的面を考察しなくてはならないのである。銀行資本が集積されるにつれて、その役割も単なる流通機構における仲介者から、銀行取引関係、当座勘定などを通じて、除々に産業資本との結合を開始するのである。産業資本の側からは巨大な固定資本を維持、拡大させるためにますます銀行資本に依存せざるを得なくなり、銀行資本はその資本を産業に投資する、またせねばならないものとしてあるのであるが、このことにより、両者は結合し、帝国主義段階を本質的に規定づける金融資本が登上してくるのである。資本は拡大、膨張の必然性を自らの体内に内包していることは先にのべたが、それはまた、自国だけでなく、全世界を内包しようとするものである。つまり、自己の姿に全世界の国を、人種を似せようとする衝動をも内包しているのである。

まさに自国における多大な飢餓の大衆の存在という資本主義的生産様式のさげえない絶対条件であり、かつまたその結果でもある姿を世界的に創出しようとする。

金融資本による資本の集積はその結果として過剰資本を生み出す。しかし、それはあくまでも相対的過剰資本である。なぜならば、工場がつくりだす商品を購入できない貧困大衆が存在するのに、資本の盲目的行動論理は過剰資本の投機場所を求めて、海外市場への志向を強める、またそうせざるをえないのである。資本の輸出は、技術や借款による輸出、武力を背景にした植民地の領有、一方的な通商条約の締結などあらゆる手段と形態によつて行なわれる。帝国主義者にとつては、現在何ら価値をもたない土地や原料でも、やがては価値を生みだすものに転化しないとはかぎらないのである。なぜなら、それを可能にすることのできる方法は日々進化をとげているのであり、帝国主義者どもは彼らの歴史からもそれを学んでもいいのだ。それ故、どのような土地でも、より多く所有している方が有利であるから、まだ分割されていない世界の土地の最後の一片のため、または分割のためあらゆる手段と形態をもつて各国帝国主義者は、多く

の土地を占取しようとする。

また、それ故に、不可避免的に経済的領土の拡張、そして、各国帝国主義者相互によくあつれきや衝突を最終的結果として現象させるのである。貪欲な世界市場獲得の動機をもつ帝国主義は、世界市場での熾烈な競争戦を展開し、植民地争奪をめぐる国家主義的対立は国家的暴力に「解決」が求められるのである。以上、帝国主義の概略の解明を行なつてきたのであるが、その爆発的集約点として第一・第二次世界大戦を位置づけることができるであろう。

帝国主義の基本的解明を行ない、その矛盾の結果としての帝国主義戦争の不可避性を考察した今、その戦争が誰のための何のための戦争であつたのか、あるのかを我々はつきりとみることができたと確信する。資本の集中、集積の必然的産物としての戦争であるならば、それはまさに、我々のためのものでは絶対になく、唯一ブルジョワジーのための彼らの汚ない利益のための戦争以外のなものでもないといえるであろう。ブルジョワジーの貪欲な野望と盲目的に自己を貫徹せずにはいない資本の行動論理＝価値法則のいけにえとして、我々プロ

レタリアート人民はそして、高校生は我々の意志とは全く無関係に戦争に送られるのみなのだ。この十九世紀末より二十世紀初頭にかけて突入した帝国主義段階における戦争は、植民地を分割拡大し搾取することにより植民地の支配をより強固にせんがための戦争であつたと同時に、「強国」自身の国内での他民族に対する圧迫を強めるための、賃金奴隷制度を強度を強化し、それを維持するための戦争であつたのである。敵は一つである。その敵を明らかにして闘うところに、反戦闘争の決定的重要性があるといひうる。だが、しかし、我々が現在、資本主義生産体制の中で後期中等教育を等しく受けている社会的存在としてある以上、我々の斗いは、我々の本来的教育を奪還するという基本的立場にたつた教育闘争と反戦闘争の結合にしか、その勝利はありえないことをも確認しなくてはならないであろう。

さて、それでは、今述べてきた、帝国主義と戦争に関する原理的な解明を基にして、現代における反戦闘争の意義を、現状把握という立場から、小し述べることにしよう。その後、高反委の闘つてきた、春から夏にかけての闘争を具体的に総括していこうと考える。

。戦後危機の集約点としてのベトナム

アメリカ帝国主義のベトナム戦争は、後進国、半植民地の激動を暴力的に制圧し、スターリン主義の脆弱性を暴露し、アメリカ帝国主義とドルの威信を、国際列強間闘争の激化を前にして、暴力にかけて守ろうとするものであつた。アメリカ帝国主義はその世界政策の破綻をなになんでも阻止しなくてはならないのであつた。

他国帝国主義も、アメリカが戦後世界を守るために行つている侵略戦争の崩壊がもたらす結果が、単にアメリカの後退としてだけ現われるのではなく、世界帝国主義体制全体の動揺としてあらわれることが明らかであるため、ベトナム戦争に協力するか、あるいは、積極的に反対できないのである。そして、また、アメリカ経済にとつて、ベトナム戦争の遂行そのものが、アメリカ帝国主義の長期の繁栄の結末をさまたげる力として働いていること、そしてそのためにますます戦争を強化していく傾向も否定できないであろう。もちろん、ベトナム戦争のどろ沼的な現状を考えるならば、その遂行はアメリカ帝国主義にとつて、経済のいわゆる「過熱化」を激化させ、国際収支に大打撃を与えるものであり、アメリカ経済の危機

をますます深めるものである。にもかかわらず、恐怖とベトナム戦争停止のもたらす経済への激しい反動への恐怖は、ベトナムとインフレへの依存をつよめていくのである。

このようにベトナム戦争は、そこにアメリカ帝国主義と国際帝国主義の全矛盾がはらまれており、その全重量がかけられて遂行されているのである。したがって、ベトナム反戦の斗いは、国際帝国主義の打倒という決定的問題と密接に関係ある実に重々しい斗いとしてあるのだ。戦後アメリカ帝国主義を盟主とした国際帝国主義の戦後世界体制の根底的動揺は、すでに明らかなくとくベトナム戦争に集中的に表現され、それはますます激化し、南ベトナム解放民族戦線の英雄的な斗いは、ますます侵略帝国主義本国の自国帝国主義打倒へ向けての労働者階級人民の斗いを要請している。いまだに「平和共存」路線なる欺瞞から足をすくい出せず、武器援助を強化するか、帝国主義に屈服し「和平交渉」なるテールを引っぱり出す（実は人民の武装解除という犯罪的な役割りしかもたない）という、ブルジョワ、リアル・ポリテイックスにひきつづられ、帝国主義の危機を側面から補完

するという反革命的姿を白日の下にさらす以外に脳のないう連スターリニストどもや、排外主義的な反民族愛国路線に基づき、「中間地帯論」なる戦略の下に犯罪的にも後進国の武装斗争のみ帝国主義打倒の斗いとして絶叫し、そのためには核武装までしてしまふ中国スターリニストどもの思惑は、だがしかし世界史の冷酷な現実の前に、音をたててその醜悪な分解を進めている。だが、世界の「国際共産主義運動」として、歪曲、裏切をくり返し反革命でしかないスターリン主義は、にもかかわらず、圧倒的な労働者階級をそのワクの内側にたたきこんでいる現実を、どんなことをしても我々は避けて通ることはできない。

我々は、帝国主義本国の反戦斗争の階級的意義をつかむとき、同時にこのことを何回も何回もくりかえし、認識しておく必要性がある。戦争が帝国主義の集中した矛盾の表現であり、その危機を帝国主義本国の労働者、人民及び、侵略国人民の血の犠牲の上に、帝国主義的に「解決」しようとすることはすでにのべた通りである。そして、今日の世界の矛盾の集中的表現はまさにベトナム戦争というかたちをとつていた。とりわけ、アメリカ帝国主義

日本帝国主義が、自国労働者人民にかけける様な攻撃は、国際帝国主義の危機として、ベトナム人民への残虐な攻撃と不可分に結びついている。帝国主義戦争は一般に、自国労働者、人民の「支持」|| 実は犠牲|| をえてはじめて可能であり、帝国主義の危機の醸成は、まず、自国労働者、人民の「支持」を可能にすべく、政治的、経済的、そしてイデオロギー的攻撃（ここで最も重要なものとしてあるものこそは、教育過程における国防意識の注入としてある）を強化することを必要とするからである。

帝国主義世界体制の危機が、後進国、植民地人民の上に最も激しく集約されることは言をまたないが、今日のベトナムの惨事は、明日の帝国主義本国の労働者人民の頭上にふりかかるとを我々は深く認識しなくてはならないのである。しかし、不可避的に帝国主義打倒へと向う後進国、半植民地の解放斗争は、どんなに不屈の斗いであつたとしても、それだけでは決定的に不十分である。問題のカギは、帝国主義本国の労働者、人民の自国帝国主義打倒へ向けての中にあることはすでに述べた。

そして、その認識の下に、帝国主義世界体制の打倒へ向けての反戦斗争こそ、かつて、レーニンとロシアボル

シエヴィキ党が貫いたプロレタリア国際主義の原則、自国帝国主義の敗北、帝国主義戦争を内乱へのテーゼを今日的にひきつぐものの任務であると言えよう。以上確認した点にふまえて、高反委運動の主體的な総括に移ろう。

○ 2・26三里塚斗争総括

一月以降、エンタープライズ寄港阻止斗争、2・11建国記念日粉砕斗争、2・20王子野戦病院開設阻止斗争を斗つてきた我々は、2月26日、三里塚現地における労学総決起集会に参加していく。三里塚問題を我々は次の点から、その建設そのものを実力で粉砕する斗争が必要であると意思一致した。まず、米帝のベトナムにおける軍事的破壊をとりつくりうものとして、アジア太平洋諸国家のより積極的なベトナム侵略加担が米帝により強く要請されており、とりわけ、日本帝国主義の侵略加担参戦国化は今まさにきわめて現実的な課題となりつつあるという事。そして、このことを日帝は、昨年の佐藤訪米をその足がためとして、一月エンブラ寄港、王子野戦病院の強行開設を突破口とつづ、さらに決定的なものとして、農民からの土地収奪をその条件として三里塚軍事空

港の建設にかかつていつたのだ。さらに、日本航空業界の拡大再編としてあり、独占のさらなる発展をかけた延命策でもあるのだ。このように、人民にとつては、土地収奪と参戦国化の攻撃、独占にとつては自己の延命策となるような三里塚軍事空港建設に反対することは、我々にとつてあまりにも当然のことではないか。二十数名の現地動員を立ちとつた我々は、反戦青年委員会の闘う青年労働者の固いスクラムに援護されつつ、全学連とともに、ブラカードを駆使して、設定された攻撃目標、公団分室へのしつような突撃をくり返し、数名が権力の前にきつつき、さらに二名の学友を不当にも逮捕されたのだつた。だが、しかし、我々の闘いの熱情は最後までくぢけることなく、現地反対同盟とともに総括集会を克ちとり、五名の代表団をさらに二十七日の斗争のために宿泊させ、帰途についた。さらにこの後我々は、全ての王子斗争、そして、その間斗われた諸斗争への不断のとりくみを行ない、斗争のより戦斗的な展開と大衆化を克ちとつていく。

3. 運動論・組織論の検討 — 8月合宿
最後に我々は、運動論・組織論の検討とその修正へと

いうよりは、その構築期に入る。6・15斗争の教訓にふまえて我々は大胆に組織運動論の変革を行なつてゆく。すでに4月段階において、4・26斗争にみられるように各校における斗争委の大衆的な闘いを中央に集約するといふことが確立されていたにもかかわらず、組織運動論的にそのことが明確されていなかったことを自己批判しつつ、6月における代表者会議において、高反委を各校斗争委の連合体とすることを確認するに至る。そして高反委そのものを現在の本来の大衆組織として設定し、各校、各クラスに斗争委を建設していく。そしてその連合体として高反委連合を位置づけるということをも確認していった。

さらに、我々にとつて最も決定的な重大性をもつものこそ、8月合宿であろう。この合宿において我々は、高校生運動を単なる反戦運動へ至少化していた傾向を批判し、高校生運動を本来的教育奪還斗争として位置づけ、その下での教育斗争と反戦斗争の結合をこそ真に追求すべき課題として全体で確認したのであつた。なお組織運動論については南論文を読まれた。圧倒的に厳しい時間的制約のためきわめて不十分な総括になつてしまつた

ことをお許しいただきたいと思う。

教育を我々の手に奪還せよ！

教育奪還斗争の旗の下、教育斗争と反戦斗争を結合し、
闘う生徒会の建設と全高連結成を克ちとれ！

全ての高校生は全国高反委連合に結集せよ！

「高校生の位置づけ」について

青 田 慎一郎

私はここで原理的な面から、高校生がこの資本主義体制でどう位置づけられるのかについて書こうと思う。

(これは原理的な面からの位置づけであるので実際の斗争委場面でこのまま大衆には提示できないことを断つておく)

高校生を位置づける場合において、元来いわれている所の一般的な階級として位置づけることはできない。それは我々が直接生産に関与していないことから来る。また、よくブチブルと言われるが、本来ブチブルとは自身自身ある種の生産手段を所有している階級のことであるから、高校生をブチブルと位置づけることはできないし、

誤りである。それでは高校生(学生)は社会的にどう位置づけられるのだろうか。私はそれを直接に生産関係に組み入れられる(個々が階級に組み入れられる)前の過渡的段階としてみる。資本主義体制の中での分化として教育も全社会的規模を持つて二種に分化した。一つは日常的な教育、つまり、スプーンをどう持つのか、これは食えるのか食えないのかを見分けさせるような教育と、もう一つは現在、我々が学校で受けているような教育である。そして、後者は当然ながら教育、そしてそれと有機的に結びつく所の学習の疎外態として形成される。そして、我々はそのような体制に押し込められているのである。それでは何故この様な教育が一般化したのか。およそ、後者的な教育は封建制度にあつては貴族の教養的色彩を帯びていたものであり、広く大衆化してはなかつた。が、しかしそれが資本主義的生産体制に移るとともに、生産が旧体制の桎梏から解放され、より社会全体を支配するにいたり、過去に支配した身分的關係を一部に残しながらも崩壊して行くに至つた。それとともに教育もその体制の全社会的になつた生産力、そして政治的には平等ということからして、(ここにおいては労働者

の教育と体制維持官僚養成の教育ということがきわめて微妙にからみ合う。後述参照）教育は一般化して行き、現在のよりな体制を生み出したのである。（それと、もう一つ日本におけるメルクマールとして教育偏重主義的なものがある。それは過去において官僚養成学校としての国立大学、そのための有名校などが作り上げられていて、それは現在までも続いている。他の諸国では比較的初期の段階において、自分の進路が定められてしまつてゐるのに対して—例えば西独・英等—日本ではその最終段階における学歴なるものが社会的に重要な意味を持つものとして現出して来ている。そのため多数の人間が高校大学教育、つまり高等教育を受けることになる。）そこにおいて我々は次期プロレタリア生産の場として—当然一部小教はブルジョワになり、また一部はプチブルになるが—の過渡的な位置におかれていると言える、ゆえに教育は当然次期プロレタリア生産というブルジョワの意識のもとに行なわれる。しかし、当然、中にはブルジョワとなるものもいるが、ブルジョワジとして決定的にはそれを見分けることができない。それゆえに現在ブルジョワジの攻撃の一つとしての受験競争があり、

けられる。

・補足

ブルジョワにとつて教育過程において次期プロレタリアートとブルジョワジを見分けられないといふことはブルジョワジをして教育過程をより一層ブルジョワ的意識注入の場とさせるテコとなる。

△高反委V運動論

南 昭

我々は今年一月の高反委結成以来の全過程を総括してきた。そして、これを媒体として六月段階における運動論を反省し、高校生大衆総体の運動基盤としての全高連結成への指向をもつて、新たに我々の運動論を確立しよう。

I

①「高校生を位置づける場合において、元来、いわれている所の一般的な階級として位置づけることはできない。それは我々が直接には生産に関与してゐないことから来

そしてより一層ブルジョワジの意図を貫徹するために、そして一定程度の効果を上げ得るものとして教育の専門分化的画策がなされてきている。そして一方では、決定的に見分けられないということもふくめて我々に対する徹底的なるブルジョワ意識のもとでの教育がしかけられている。それは当然教育一般に対して、ブルジョワ的意識をもつような教育として現われている。その面でそれは企業内で労働者に行なわれている所の愛社教育的なものであろう。そしてそこにおいて、ブルジョワの意図する所の商品、より安価な商品としての労働力を補なわなければならないという目的の一端を意識的な面の形成である所の教育に、そして必要な知識だけ（ブルジョワにとつて商品としての労働力所有者だけであればよい労働者にとつて）を持つた若年労働者（賃金労働者）生産するための教育にかけようとしているのである。したがつて公式の意味での階級IIプロレタリアートとしては位置づけられないが、その社会的面（前文参照・ブルジョアジIとの対立など）からそして自分からの解放はプロレタリアート解放としてのみ対成できうる階層として位置づ

る」というのは、全く正しい。要するに、教育それ自体は決して労働力商品の再生産過程ではないのである。問題は、こうした教育が現体制内においては必然的に労働力養成過程へと組み込まれる点に、我々の受ける教育の矛盾があるのであり、最初から労働力再生産過程と同一視するところからは教育闘争への視点は打ちだされない。我々は単に経済的闘争を行つて行くだけではなく、そうしたものも自己形成という教育の本質的意義の奪還という視点から追求されなくてはならない。そして、帝国主義段階においては政府II独占資本によつて教育それ自体も義務教育なる形態を通じて、全社会的に労働力商品の開発という任務を強いられる。しかも、この教育体制の内部においては我々と対制の一定の合意のもとで階級分化が進展して行く。この合意を前提としているからこそ、個々の高校生において「デキル、デキナイ」は、単に学問以上の重みをもつているのだ。だが、このことは我々の運動の立脚点が階級分化をめぐつてあるということをはかり詳しく考察してきているので、それを参照にすることにして、次に、我々が支配階級からいかなる攻撃

がかけられているのかを具体的に考察しよう。

②第二次世界大戦の資本価値の破壊、過剰資本の処理を行つた日帝は、さらに朝鮮戦争の特需ブームをテコとして、高度成長を成し遂げた。この高度成長を支えるものとして独占の脆弱化、日銀信用の増大などと並んで低賃金構造の支えてきた利潤の安定がある。そして、この低賃金層をなしていたのが若年労働者であつたのである。しかし、若年労働者は30年代以後、深刻な欠乏状態に致つた。つまり、農村、中小企業からの産業予備軍が底を覗かせてきたのである。これは、強いては利潤率の低下を促し、いわゆる「転換期」への一要因をなすに致つた。そうした中で、独占資本は内部留保による産業の合理化を推せざるを得なくなつたものであり、これに見合つた形で「中期高等教育」自体も大きく改変された。そうしたものとして、コース化、職業専門化といつた教育の「細分化」がある。(東京の学校群制度)このようにして、教育の再編が行なわれるなかで、極めて職業的技術的な教科が我々に課せられている。さらに、国家権力により検定された教科書が我々に押しつけられ、教科書内容それ自体が官制化されてしまつているのである。これ

は、我々が①で考察したように教育が、社会的政治的であることを示している。したがつて、我々の闘争は本来的教育的奪還、全的自己形成としての学問追求の場を獲得して行なわれる。このことは、我々の受けている授業が学問でないということの意味するものではない。そうではなく、問題は次の点にある。教科書の官制化は我々が学問をしていくのに不必要であり、学問的態度を阻害するものである。だから、国家権力は学問に対する干渉をやめ、教師と生徒にまかせて学問を行なわせよ、というのが我々の要求する点である。(「反戦高協」14号31頁下段はこの問題に関して我々には納得しがたい点が多い)

さらに、高度成長が行きまづつてくる中で、日帝は新たな市場開発として海外へと乗り出して行つた。それは、日韓条約が明白に示すところである。つまり、国内への投資が先に考察したように利潤率の低下に遭遇している時点において、韓国の安い労働力はその国内が比較的安定しているだけに、日帝にとつて最大の魅力であつたのである。また、日帝はスターリニストと手を組んだ形でのシベリア開発へと乗り出し、さらには、ベトナム戦争

への参戦国化をめざしている。こうした海外進出を押し進めて行く中で、日帝の軍事力の脆弱性は大きな障害となる。そうした中で日帝の再軍備化は我々高校生に対して国防教育、ナショナルリズムの高揚としてかけられている。(紀元節復活・神話教育復活・教科書検定、改悪、期待される人間像・etc.)

第三に、管理通貨制度を基礎とした公共投資などによる物価値上げ、それと共に深化した私学経営の行きづまりによる授業料、入学金の値上げがある。

第四に、高校生の情性化をねらつた生徒会の御用化、連合禁止、さらには教育庁通達にみられる政治活動の禁止がある。これらは、我々の受けている教育自体がいかにインチキであるかを如実に示している。学習とは実践を媒体としなくては完成されないものであり、我々の認識は実践という主客関係を媒体として発展しうるのだと考える。この第四点はIIにおいて生徒会の問題を考へて行くときに大きな障害となつていことが明らかとなる。以前にあげた諸課題に対する反響も自治権の獲得を通して、この第四点への我々の攻撃をいかに鋭く行つて行くかによつて左右されるのだ。

さて、以上のごとき我々にかけられた攻撃も単に経済的政治的分析によつて導びかれるものとして認めてしまふのではなく、これらを我々が高校生活をすごして行くなかで現われる諸問題のうちに把握して行かないかぎり、高校生運動などは論ずる意味がない。そして、こうした問題は、T校A校等の総括を通して行つてきた筈である。さて、我々はこうした高校生にかけられてきた攻撃にいかに対処し、より有効な高校生総体の運動へと高反委運動を推進させるのかを組織運動論的に考察してみよう。

II

①Iで述べてきた高校生総体へかけられてきた支配階級からの攻撃をいかに弾ね返して行くのか、という問題を考へるとき、まず問題となるのは、高校生総体が存在しないという逆説である。つまり、外部から操作するには、情性的に高校生総体なるものが存在しているが、高校生である者が外部権力に対抗しようとするとき、他の高校生は三人称的に存在となつてしまふということである。

これは、我々の全体化され生きた総体としての組織の未確立、自治権の不獲得である。

②したがつて、我々は学内における日常的活動の全体化

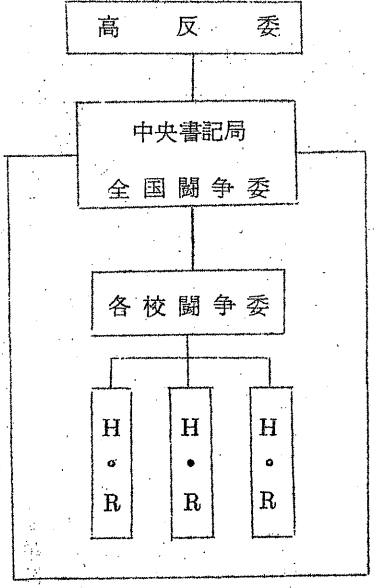
を行つて行くものとしての組織——大衆組織が確立され、そのもとにIで述べたような攻撃に対する反撃を行なつて行くことを、六月段階で確認しておいた。すなわち、高反委は各校における闘争委の連合体である。この闘争委は、各校における個別闘争を展開して行くものであり、将来的には「闘う生徒会」へ自己転化して行くものである。したがつて、サークルの任意の人間を対象として行なわれるという性格とは違い、あくまでも総体に働きかけて行くものである。そして、この闘争委は基本的にはクラス参加をもつて運営される。つまり、諸個別闘争に関する闘争委のメンバーはH・R討論を展開し、そしてクラス決議を行うことを通して生徒会総体を変革するのである。(A校では、すでにこの形態が可能となつた)このような学内活動を通じてのみ、今までいわゆる「高校生運動」が高校生運動としてなりえなかつた、決定的なウイーク・ポイントである「いかにして全校的な闘争を盛りあげて行くのか」に答えられる。(T校における学園祭闘争)

我々はいきなり最初から「生徒会をどう変革するのか」ということを問題にしない。我々は、まず闘う生徒会の

母胎となるものを形成して行く過程のなかで、生徒会としての機能を闘う闘争委が荷負つて行くなかで「生徒会」という外皮をかぶつて行くにすぎない。

では②で述べた各校闘争委はいかにして高校生総体と結合するのか。それは、各校闘争委で選出された代表で構成された全国闘争委と、さらに、その中から選出された高反委中央書記局によつて、高校生運動総体の全体化が行なわれる。この段階において個別課題の全体化を行い、また総体的な支配者階級への攻撃が提起される。

③以上、今まで述べてきた我々の運動の全過程を图示してみよう。



ここに明らかになつたように、高反委自体が将来的には、生徒会自治組織の形成を通して、全高速の母胎となりうるものであると考える。

A校△高反委▽総括

藤井 薫

A校△高反委▽は昨年の文化祭期を通じてふくれあがり(民青再建)、あの階級斗争の質的変換を促した「羽田斗争」を契機にもろくも自己壊滅したA校民青班、つまり、日本共産党の革命路線に疑惑を抱き、真の党派斗争をすべく、われわれ高校生の学問的探求の立場(民青においてはこの人間としての当然の権利すら認められていないのだ)から反代々木系の集会・デモ・機関誌とぶつかりあう中で、思想的理論的人間的にあまりにも墮落しつくした「共産主義」の看板に石を投げる心をもつて、そのもとに私物化され、また、自ら私物化している「民青」高校生運動を乗り越えるべく新たな高校生運動を日共△民青と決然と訣別した地平で追求する意志の下で誕

生した。

(民青の理論的批判は次の機会に掲載したいと思う) それにしても、自らの本質的存在も世界情勢もさらには真の高校生運動(民青には始めから終わりまで「高校生運動」は存在しないし、また出来ないのだ)をも遂行するといつた主体性が民青時代に侵されていたことは、生涯の恥ともいふべき大きな深痛を被つた。

その後、この「恥」を内部にかかえこみながらのやむをえぬ必然期ともいふべきか、A校△高反委▽運動を推進する組織性を主体的に持つた強力な中核が、数多くの斗争(エンブラ寄港阻止・紀元節復活反対・成田新国際空港建設阻止・米軍王子野戦病院開設開院反対・国防教育、教育三法粉碎・etc)をA校△高反委▽に結集した多くのメンバーが街頭、現地において体験しながらも、その各々の個別斗争についての全体的討議が常に曖昧な経過と形態とを取り続けたゆえに、学内斗争(生徒会選挙・一般的日常活動等)も常に街頭行動過程での成果・教訓を高校生運動次元で有機的に十分に消化し得ず、一般生徒への影響、啓蒙というものがむしろ、△我々▽との間隙を教条的に創り、組織強化拡大も思うように実現

されなかつたというをもつて、あるべき中核をA校
A高反委Vによつて形成され得なかつた結果、その現象
として街頭集会・デモへの動員数の停滞化、また、最近
A校A高反委Vの内部に当然として、学生運動戦線の様
々なイデオロギーが我々の意志に関わらずにその影響を
強く受けているために、一般活動家の理論的精神的混乱
を激しく生じせしめ、現在、A校A高反委Vの全般的再
構築が必要不可欠となつてきているのである。

それゆえに、我々は次のことを反省し確認して、今後
の運動を邁進して行くべきであろう。第一に学生運動戦
線のイデオロギー斗争による反映が、高校生運動を創造
的に築き上げて行く過程で大衆組織段階に無雑作に浸透
し、高校生運動次元の個別斗争の中で、その運動の窮極
目標達成の限界性の追求を大衆が自主的主体的に推し進
める上に、極めて大きな障害となつていることを反省す
るならば、A我々Vは決して高校生運動形成の視点から
離れた無駄な混乱を避けるべき独自の高校生運動の課題
を階級情勢と高校生総体の運動の状況を分析しながら、
追求し設定し斗争を全体的に取り組みなければならぬ。
学生運動の発展性活発性と現在の高校生運動のそれとは

断じて違ひし、学生運動上においても、各組織者が主体
的に乗り超えたとしても、さらに、今後の熾烈なる階級
対立に耐え得ても、高校生運動が、それに耐え得るとの
保障は現在、絶対的にあるとは言いがたいのだ。なお、
付随的に付け加えるならば、A我々V高校生を大学に進
学しあらかじめ学生運動を実行する者と強く意識し、学
生運動の問題・限界を高校生大衆運動段階でA我々Vが
題材化してしまふといつた、逆に運動へそれもありに
貧弱なA我々Vの運動の内部に)を閉鎖的な傾向
にして行つてしまふような面を自己批判しなければなら
ない。第二に今まで不明瞭だつたが最も重要なこととし
て、A我々Vの中心的生命的な斗争との関係が、A我々V
が疎外された社会体制に組み込まれた学校を通じて、現
実の政府支配者階級がA我々Vをよりその新たな支配体
制を貫徹すべく社会(公民)の一員として形成している
ことに對し、A我々Vがいかに高校生総体として現実の
疎外された学校教育を革新し、この体制を支える文部省
||日本帝国主義に打撃を与え、A我々Vの「教育」を取
り戻すことにあることを認識しA我々Vの高校生運動を
形成するべきであろう。

第二の問題を具体的に展開するためにA校A高反委V

としては指導部の確立と学内活動の最小限単位であるク
ラスにクラス委員会を設立しなければならぬ。クラス
委員会は第一にクラス生徒大衆における高反委運動形成
の核であり、第二に生徒会変革一般を担う主体であり、
第三にクラス委員会をまだ出来ていないクラスに結成さ
せるために他のクラス・クラヴへの働きかける主体であ
つて、ここから大衆的に選出されて指導部としてのA校
会議を構成する。A校会議は、それぞれの学校で高反委
メンバーが少ない時は全員参加でやるのが原則とならう
が、クラス委員会が独自性と自主性を発揮し多くのクラ
ス委員会が設立している状態ならば、民主的中央集権制
の組織原則に則つとり、クラス委員会から人数に応じた
A校会議を形成して、日常の執行、議決機関任務を遂行
し、また、全国高反委連合の各校代表者会議に代表を選
出するだろう。その他、我々の一般的理論強化と運動の
立脚点を理論的に強固にかつ深化させ、さらに運動の地
盤を広げるものとして社会科学研究会(非合法)を設立
しなければならぬだろう。

最後に

A文化祭斗争の基本的任務方針V

主体的力量の都合でA校A高反委Vとしては文化祭に
独自な取り組みはなされないが、9月から文化祭期を通
じて、社研の実施と各クラス委員会の各クラスにおける
任務を、各クラスの文化祭への取り組みとクラヴの文化
祭の取り組みに各クラス委員会メンバーはその全的任務
の課題を追求し実行すること求めなければならぬ。
その成果は「赤塔」No.2(A校会議機関誌)に発行され
るだろうし、10・21国際反戦統一行動に対する10・21国
際反戦A校斗争委員会の個別斗争を展開するうえにあつ
て引き継がれるものとしてあるだろう。

教育奪還 / 全高連結成 /

T校斗争委総括

序章

水島 ゆり子

T校斗争委は今年春、T校に於る恒常的斗争委として
発足した。そして斗争委メンバーとオブザーバーによる

討論会を、定期的に行い、学内に於る組織基盤の確立を図り、学内斗争にとり組んで来た。

そして四月段階に於ては4・26国際反戦集會に十数名動員し六・一五高校生集會にも数十名動員を勝ち取つた。又メンバーの文化祭サークルへの積極的介入と、そこでオルグ活動を通して今秋の一大斗争目標である所の「文化祭」「10・21国際反戦デー」へ全力を上げて闘つてゐることをまず最初に報告するとともに以下批判的に我々のこれまでの活動の総括とあわせて将来の展望を述べたい。

一、我々をとりまく学内情勢

本校に於ては今まで我々の様な組織は全く存在せず、ただ民青諸君(≡日共系)と日共系教師のなれ合いのもとに本校に於ては即自的意識を持つた大衆を指導できず、学内斗争なるものはほとんど行なわれなかつた。そこに我々が斗争委を設立した意義は極めて大きいといつても過言ではなからう。しかし本校においては(否これは高校全般に見られることだが)所謂受験競争のしわざが三年生を始めとして現われ、生徒自身の個別的な問題に對する即自的意識がその中に疎外されてしまふという種

めてナンセンスな状態を現出して来ている。そして又、学校での授業内容といえはサラリーマン教師の画一的、反創造的な我々にとつては、没主体的な授業であり「授業の面白くなさここに至り」の様を状態を望んでいる。

その中に於て我々自身の大衆的基盤の確立を彼らの中にある大衆としての即自的意識を我々のヘゲモニーのもとで結集することによつて目ざしたのである。

それは前述の様な状態からして極めて困難な課題であつた。しかし我々は今まで民青によつて歪曲され押しつぶされて来た学内斗争を真に我々の大衆の爲にとりもどすために困難に立ち向つたのである。そこに於て我々は教師との連帯など全く考えられなかつたし、又その様な方向もとらなかつた。何故ならば現象面においては、本校の教師は反動でなければ日共又は政治的アパシーという極めてナンセンスな状態である。彼ら是我々と敵對する存在でしかなかつたのであり、又一般的に(≡原理的に)云つても教師という存在は体制内「教育者」として我々に對する時には、それは文部省の媒介物以外の何者でもないものであり、絶対にそれは連帯できる對象ではあり得ないのだ。真に教師と我々が連帯するのだつたら、

我々自身が文部省と對決する時(具体的には「全高連」と称して)彼らと「労働者」として闘う労働者として連帯するのである。

(ここで所謂「進歩的教師」のことが問題となるが教師自身文部省によつてがんにがらめにしはられてゐる状態をしてすぐにでも文部省(教育委員会)にとつて都合の悪い人間は組合の抵抗があつてもとばしてしまふという状態に於ては、そこにおける「連帯」は全く個人的なものでなく全体的な体制内「教育者としての教師は我々にとつて連帯の對象でないことは明白である。)

二、我々自身に對しての批判的総括と展望

我々自身に對しての批判的総括と展望をのべてゆきたう。云うまでもなく高校に於る大衆の組織は自治会であり、我々の意志は原理的には自治会役員(我々の手によつてえらばれた)によつて自治会に反映するのである。しかし本校においてはその自治会はもはや生徒全体が形式的に自治会員であるにすぎず、その本質はどこか月のかなたへでもすつとんで行つてしまつたのではないかと疑いたくなるほど大衆的基盤を失つて形ガイしておりかつ学校側の御用機関になり下つてしまつてゐる。まさに

そこにはママゴトさえも行うことが危ういのではないかと思われるくらい墮落してしまつてゐるのだ。

しかし民青系の諸君はそのナンセンスな思考態度で、何を感懐しているのか。(彼らの状態からすればそれは当然なのかもしれないが)まだその自治会執行部をとつて悦に入つてゐるようである。我々はその様な中で究極的には真に大衆的基盤をもつた自治会を結成すべくして自らがそれに転化すべき大衆組織として自らを位置づけた。我々は大衆の即自的ではあるが一つの課題に對しての意識を結集しこれを高め真に大衆の大衆としての意識と反映すべき機関として活動を開始したのである。

我々は大衆的基盤を尙ら有しない自治会執行部等には用がな。我々が求めるのは、そして創りあげて行かなくてはならないのは真に大衆的基盤を持つた本校自治会であり、我々の手にする我々のための(教師や文部省の都合の爲ではなく)自治会なのである。しかしながら現在においては我々の組織は当然ながら非合法的組織であり、全校生徒的に比較したならば我々の力量的不足は残念ながら認めねばならない。そして当然の制約から我々の組織自身現在に於ては活動家組織的色彩を帯びてゐることは我

々自身批判的に見つめてゆかねばならない。しかし我々はその様な状態を前述の様な困難な状態を克服しなければならぬ。

その一つの戦術として我々は一つの個別的課題に対して我々自身斗争にとり進む場合そこに於て一つの大衆組織を形成し、より広範な大衆を招集するという。そしてそこに即自的意識で結集した大衆を我々の真の大衆的基盤を持つた自治会を作るといふ恒常的斗争委のもとにオルグして行くという方向性をもつて現在の闘いを進めていくことを報告しておく。

学校側の露骨な弾圧に屈しない我々の意志を示したのである。しかしながら学校側はその様な我々の態度に対し、再度弾圧をしかけ、露骨な自治介入を図つてきたのである。それに対して我々は再度許可なしでこの様な学校側の態度を弾劾するピラのパラマキを強行して来た。クラスまわりをして我々の方向性を全生徒の前で訴えたのである。

我々は決して学校側の弾圧に対しておめおめひきさがる様なことはしない。我々の学園祭の位置づけ「自治の一環としての学園祭」という方向を少しでも貫徹するた

「反戦高協」運動論批判

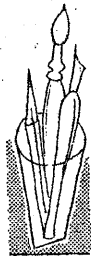
松葉みどり

反戦高協の諸君(一部)の「運動論」に対する我々の批判を提示するなかで、我々の組織運動論を確認しよう。『高校生は運動全体の中で、無制限に参加しうる本體と、思想的に強化されたある程度閉鎖的な指導部の分業は、運動がそれによつて維持される矛盾の実現形態である』と彼らは言うが、ここにおいては大衆組織の指導部とはいかにあるべきなのか、ということが問題となる。我々は、大衆組織はそれ自体で形態的には自己完結したものだと思える。大衆組織は大衆に対して全面的に開かれていなければならない。したがつて、彼らという、プロレタリア解放闘争の一環として高校生運動を位置付けるのなら、その具体的個別的戦術を大衆に提示し、それが支持された形でその大衆組織の戦術になることとよいのであるが、大衆組織の指導部として閉鎖的な指導部が登場するというのは、大衆を全く受動的な存在としてしかとらえられていなくともいうことを物語つてい

ぬに、そして全く生徒から遊離し「行事化」してしまつた学園祭、自己目的化し疎外された学園祭をそしてその様な状態の中でアレルギー的学園祭の沈滞を叫ぶという極めてナンセンスな状態を乗り越え、真に我々の手に学園祭を我々のものとしてとりもどすために、我々は斗わなくてはならない。我々の手にする自治がない所に我々の手による学園祭ではないのだ。御用化された自治会を我々の手にとりもどし顧問制の押しつけ、ピラの検閲などを粉砕して行かなければ我々の自治、そして学園祭等はいえぬのだ。この意識のもとに我々は学園祭を斗つて行くということを報告しておく。

追—この学園祭斗争の中で民青はその本性を正にドラステイックに現わし、この斗争を日和り、日共系教師を顧問とするなどという学校側への屈服を見せたのである。教育奪還斗争の旗の下高反委に結集せよ。

共に斗わらん！



るのではないか。

さらに、この点については、彼らが高協自体をその二重性において位置づけた問題へと通じるものである。現在、高校生運動のおかれていゝるその貧困状態において、(我々の運動に参加してきた者が実態としては活動家的存在であつたことは確かだが)しかし、そのことをもつて活動家組織と大衆組織を折衷的に反戦高協に内蔵させておくのでは、将来的問題に全てを打撃すてしまふことになるのではないのか。この誤まつた組織論から、反戦高協自体がこうした運動の曖昧さから、現在セクト主義、官僚主義に陥り、組織的にガタガタになつてきている。大衆組織それ自体においては、大衆は自分自身の問題を自らの頭で考えて行く中で、運動へと参加してくるのである。そうした中に、我々も大衆の一人として自らの問題を投げかけ大衆の支持(例えばクラス決議)を得て行く中で、民主的手続きを通して、大衆の指導を主体的立場から徹底的に完結させ行くのだ。そのことを抜きにして、受動的に大衆を排他的な指導部が分業として指導するというのは全くナンセンスの一言に尽きる。

本来的教育を我等の手に奪還せよ！

インターナショナル

一、起てうえたる者よ今ぞ日は近し
 さめよ我が同胞あかつきは来ぬ
 暴虐の鎖断つ日旗は血にもえて
 海をへだてつ我等かいな結びゆく
 いざ斗わんいざふるい起ていざ
 ああインタナショナル我等がもの
 いざ斗わんいざふるい起ていざ
 ああインタナショナル我等がもの

二、闘け我等がおたけび 天地とどろきて
 屍越ゆる我が旗 行く手を守る
 旺政の壁の破りて 固き我がかいな
 今ぞ高くかかげん 我が勝利の旗
 いざ斗わんいざふるい起ていざ
 ああインタナショナル我等がもの
 いざ斗わんいざふるい起ていざ
 ああインタナショナル我等がもの

ワルシヤワ労働歌

暴虐の雲光をおおい敵の嵐は荒れ狂う。
 ひるまず進め我等が友よ敵の鉄鎖を打ちくだけ
 自由の火柱輝やかしく頭上高く燃えたちぬ
 今や最後の斗いに勝利の旗はひらめかん
 起て同胞よ行け斗いに聖なる血にまみれよ
 誓の上に我等が世界築き固めよ勇ましく

斗いのスローガン

教育の奪還
 都教育庁通達粉碎 / 教育三法粉碎
 国防教育粉碎 / 教育反動化阻止
 ベトナム戦争反対
 侵略加担 // 参戦国化阻止
 沖繩奪還
 教育奪還斗争の旗の下全ての高校生は
 全国高反委連合に結集せよ
 共に斗わん

